

# ポローニア

paulownia

新しい春、附属学校の今



筑波大学附属学校教育局  
<http://www.gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp/>

vol. **24**

# 平成24年度 附属学校 研究発表会 日程表

附属学校教育局と各附属学校合同での研究発表会を下記日程で開催する予定です。ぜひご参加ください。

※各附属学校が会場となります。(附属学校研究発表会を除く)

区 分	名 称	研究協議会等開催予定日
附属小学校	研究発表会	平成 24 年 6 月 15 日(金)・16 日(土)
	初等教育研修会	平成 25 年 2 月 14 日(木)・15 日(金)
附属中学校	研究協議会	平成 24 年 11 月 10 日(土)
附属高等学校	教育研究大会	平成 24 年 12 月 8 日(土)
附属駒場中・高等学校	教育研究会	平成 24 年 11 月 17 日(土)
附属坂戸高等学校	総合学科研究大会	平成 25 年 2 月 23 日(木)・24 日(金)
附属視覚特別支援学校	研究協議会	平成 25 年 2 月 16 日(土)
附属聴覚特別支援学校	関東地区聾教育研究会「聾教育実践研修会」	平成 24 年 6 月 14 日(木)・15 日(金)
	聴覚障害教育担当教員講習会 (文部科学省、筑波大学共催)	平成 24 年 11 月 20 日(水)～22 日(金)
	聴覚障害早期教育公開研修会 (特別支援教育研究センター後援)	平成 25 年 2 月 22 日(金)
	筑波大学連携研究報告会 (学系と附属聴覚特別支援学校)	平成 25 年 3 月(予定)
附属大塚特別支援学校	研究協議会	平成 25 年 2 月 15 日(金)
附属桐が丘特別支援学校	自立活動実践セミナー	平成 24 年 8 月 1 日(水)～ 3 日(金)
	実践研究協議会	平成 25 年 2 月 7 日(木)・8 日(金)
附属久里浜特別支援学校	実践研究協議会	平成 25 年 2 月 7 日(木)・8 日(金)
附属学校教育局	附属学校研究発表会(会場:東京キャンパス)	平成 25 年 2 月 23 日(土)

## 目 次

■ 教育長挨拶	<b>附属学校の未来を思え</b> ● 東 照雄 ..... 1
■ 新任校長挨拶	新時代の総合学科 ● 加藤衛 弘 ..... 2
	聴覚障害教育の未来 ● 原島恒夫 ..... 2
■ 新任挨拶	気持ち新たに ● 松本末男 ..... 3
	懐かしい茗荷谷です ● 四日市 章 ..... 3
■ 研究発表会	附属学校研究発表会 ● 木村 範子 ..... 4
■ 研修会報告	春期研修会 ● 熊谷恵子 ..... 4
■ 交流会報告	新校舎での新任教員交流会 ● 江口勇治 ..... 4
■ この指とまれ	私と授業と基礎英語 ● 橋爪 鞠実 ..... 5
■ 新任教員奮闘中	子どもたちと共に ● 由井 蘭 健 ..... 5
■ TOPICS	第7回「科学の芽」賞 ● 松本末男 ..... 6

### ● 広報誌名「ポローニア」の由来

「ポローニア」とは、「桐」の属名であり、Paulownia と綴る。本誌を「ポローニア」と名づけたのも、筑波大学の紋章に「五三の桐」が使われていることに拠る。しかし、ポローニアを付与した理由が他にも存在する。近代西洋医学を日本に伝えたシーボルトは、日本において、桐が瑞祥の象徴と見なされ、皇室をはじめ高貴な家柄の紋所として用いられていることを知り、Paulownia (後援者のオランダのパウロウナ公妃に因む)こそが植物の桐のイメージを表現していると考え、桐の学名(Paulownia imperialis)に定め、パウロウナ公妃に献呈した。今後いつまでも、多数の読者に愛され続けることを願い、ポローニアの故事来歴やエピソードに基づき、ポローニアと命名した。



## 教育長挨拶

## 附属学校の未来を思え



筑波大学副学長・理事  
附属学校教育局教育長

東 照雄

今年のポローニア1月号には、“今年は、昨年の大震災を乗り越えて前進する年である”と述べました。その意味は、大学としては、法人化後の中期計画・目標の第2期の3年目に当たり、その着実な達成を意図したものであります。幸い、昨年度までは、年度計画がほぼ順調に進展しているところではありますが、中期目標・計画のより質の高い具体的な成果を出すように皆で協力してさらに確実に邁進しなければなりません。その中で、幾つか重要な取り組みがあります。その一つに、附属学校教育局と附属学校11校は、特別支援教育研究センターや理療科教員養成施設とも協力しながら、3つの拠点構想を、附属学校全体として進展させて行くことが期待されています。幸い、新校舎の4階には、3つの拠点推進室が設置され、4月からは附属学校教育局の運営も教員・事務組織ともに新体制で臨んでいます。筑波大学は、建学の精神にあるように、社会および世界に開かれた大学として、附属学校においても、その未来を想いながら、筑波大学の附属学校だからこそ育成できる人材を世の中に送り出す社会的使命があります。その認識を共有し、今年度の諸活動、とくに24年度の重点目標・施策を促進するため、今年は、5月から7月にかけて、各附属学校を訪れて、主に教員の方々と懇談会を開催して、現状と課題について意見交換を進めています。

ところで、わが国では、産官学をあげて、グローバル人材育成の必要性が急務であると声高に言われています。国際性豊かな人材育成は、勿論、一朝一夕になるものではありません。しかし、わが国の今後を見据えたとき、世界的に活躍できる人材を、大学や大学院のみならず、なるべく早い学校教育段階から一貫して育成する必要があります。幸いにも、本学には、これを行うことが出来る附属学校という環境に恵まれています。既に、各附属学校の特色を活かした国際的教育に意欲的に取り組んでいます。筑波大学附属学校全体として、わが国のモデルになるような先進的な教育課程の中身作りに着手することが肝要です。現在、筑波大学では、日常的な国際性豊かな大学を志向して、英語による学位プログラムの運用を中心にしたグローバル30(G30)事業などに精力的に取り組んでいるところですが、今年度からは、さらにG30+が開始される予定です。附属学校の国際化においても、これまでの国際交流実績を踏まえて、上記のような大学の国際関連事業に密接に連携した形で、さらに進めたいと考えています。

どんな大きな大河の流れも最初は一滴の水滴です。普段の努力の積み重ねが重要であることは言うまでもないことですが、今年度が、附属学校教育局および附属学校にとって稔り多き年度となり、今年度の附属学校の重点目標・施策に掲げた各項目について、未来に繋がる大きな成果を上げることが期待して、平成24年度の始めの言葉と致します。



## 新任校長挨拶

## 新時代の総合学科

2012年4月から、附属坂戸高等学校の校長に就任しました。大学では長期的視点が必要な農林業に関する歴史研究を専門とし、持続的な社会のあり方を追究しています。

高校のある坂戸市は埼玉県の中南部、池袋から東武東上線で45分ほどの位置にあります。本校は1946年、当時の坂戸町など1町5か村によって農家の後継者養成のため学校組合立校として創立され、1953年に東京教育大学附属に移管されました。移管後も創立の理念を尊重し、国立大学附属としてはめずらしい農業科など専門学科の高校でした。しかし1994年、こうした教育を支えてきた人材と施設を活かして「総合学科」を全国に先駆け創設し、以来350校余りに増加する総合学科高校をリードしてきました。2011年度からは本校総合学科としての第3期改革が進行中で、そこに私が着任した次第です。

「新時代の総合学科」とは、この第3期改革についての理念と実践を著した本校編(2012)のメインタイトルです。本校は生徒の変化に的確に対応し、増加する大学進学希望者の夢

附属坂戸高等学校 校長

加藤衛弘



を実現できる総合学科へと進化するため、職業科目とともに普通科目を充実させてきました。そうした多様な科目から生徒は自ら時間割を作成しますので、生徒には主体的な学習能力が求められます。現実の産業・社会と自らの個性や学習との関係について、生徒自身による広い視野からの理解が必要となるわけです。それを支援するため、「産業社会と人間」をはじめとするキャリア教育科目の体系化・高度化をはかっています。海外での教育活動や留学など、多様な先進的取り組みへの生徒の積極的な参加を通じて、国際的視野をもち社会をリードできる人材育成においても、確実な成果をあげつつあります。

この改革を成功させるため、改革を実践する意識と能力の高い生徒・教職員によりよい教育環境を整えられるよう、微力ながら力を尽くして参りたいと思います。

## 聴覚障害教育の未来

4月から附属聴覚特別支援学校の校長を務めることになりました。これまで聴覚活用と聴能評価、読話に関する研究を中心としてきましたが、最近は聴覚障害学生のための情報支援や手話の活用、聾教育の歴史にも関心を広げています。

ところで補聴器の発明により、聴覚障害教育は技術革新とともに大きな変化を遂げてきました。最近では早期発見のための新生児スクリーニングにより、早期教育の効果が期待されるだけでなく、人工内耳の普及に伴う聴覚活用の可能性も広がり、聴覚活用としてはまさに黄金時代を迎えようとしています。しかしながら、同時に医学・工学的技術のみでは解決できない問題も散見されるようにもなりました。教育の中心は「人」です。医療関係者と教育関係者の連携無くして、聴覚障害教育に真の利益はもたらされないと考えます。また、手話の活用についてもその検証が重要な時代となってきました。まさに聴覚障害児の早期教育の効果が教育者の専門性により大きく左右される時代ともいえます。附属聴覚特別

附属聴覚特別支援学校 校長

原島恒夫



支援学校は、多くの有能な教員と指導法の宝の山です。これらの宝を生かすも殺すも「人の連携」ではないでしょうか。

私は大学で聴覚障害学生支援のスーパーバイザーも担当しています。聴覚障害学生は筑波大学に入学してから、様々な教育背景をもつ聴覚障害学生や健聴学生と出会い、集団の中で影響し合いながら成長していきます。言語力、学力のみならずコミュニケーション、人間関係を学び発達していきます。大学時代は、勉強以外に学生同士のコミュニケーションが大変重要であり、それを主体的に学習する大変良い機会です。

新米校長として右も左もわからないことだらけですが、これからの聴覚障害児教育の前進のために、少しでもお役に立てることを願っております。



## 新任挨拶

### 気持ち新たに

附属学校教育局 教授

**松本末男**



この4月より、久里浜特別支援学校から附属学校教育局教育長補佐として赴任しました、松本末男です。どうぞよろしくお願いします。これまで、子供たちが目の前にいる学校に長くおりましたので、子供の声がしない東京キャンパスは、静かですが、寂しい気持ちが強く、なかなか慣れません。

教育長補佐は、昨年度までされていた坪田、小林先生という大変力のあるお二人の後を受けてなので、大変緊張しています。教育長の補佐としての仕事が十分できるかどうか心配ですが、精一杯努めたいと思います。私の主な仕事として、免許状更新講習、科学の芽、国際教育関係、オリンピック教育、地域社会連携事業（大子町、文京区等）、特別支援と普通附属の連携等多岐にわたります。とにかく打ち合わせや会議が多いのに驚きます。筑波キャンパス2日（原則月・木）と、東京キャンパス（原則火、水、金）3日で、行ったり、来たりの日々です。久里浜からは、時々局の会議に出るのが、遠くて大変でしたが、毎日の通勤は、車で10分と今から思うと夢の

ような通勤でした。筑波は、学生時代に比べるとTXが出来て格段に便利になったのですが、やはり遠いです。多くの教職員が同じような移動をしています。その大変さが実感としてわかる毎日です。

私は、教育長の補佐としての立場からの仕事をしながら、教育長と各附属校の先生方とのパイプ役になりたいと考えています。これまで特別支援学校に長くいましたので、普通附属の先生方とはなかなか接点がなく馴染みがないと思います。今後いろいろな場所で顔を合わせると思いますので、どうぞお声をかけてください。

現在東京キャンパス4階の部屋に次長の石隈先生と一緒にいますので、どうぞ局に足を運ばれたときにはいらしてください。部屋には大きなテーブルがあり、グループで来ていただいて研究会にも使えます。また、隣は3拠点の部屋がありますので、附属の先生方にもっと活用してもらいたいと思います。学校間の連携や研究等に使われるときには一声かけてください。

大学の中で国際化が大きくクローズアップされています。その流れの中で、附属11校が、これまでの歴史を踏まえて今以上に発展し、成果を社会にアピールできるかどうか、大事な局面を迎えています。今後、附属の先生方とともに頑張っていきたいと思っています。

### 懐かしい茗荷谷です

この4月から、東京キャンパスの特別支援教育研究センターに勤務することとなりました。どうぞ、よろしくお願いします。東京キャンパスのある大塚の茗荷谷では、新校舎を中心とする明るい環境ができあがっており、右を見たり左を見たりしては、驚いております。茗荷谷は、私が東京教育大学の大学院生として最後の学生生活を過ごしたところでもあり、あちこち歩きますと若い頃のことがいろいろと思い出され、懐かしい思いがします。学生生活を終えて、附属の聾学校に長く勤務したこと、その後、校長として教育局の会議に出席したことなど、これまで私は、ずっと茗荷谷との関係の中で、またここに足を運びながら仕事をしてきたのだと改めて思いました。

さて、近年では、大学や学校の教育やその在り方について、社会が厳しく注視するようになってまいりました。一方では、インクルーシブ教育をはじめ、社会の教育に対する期待もますます高まってきているように思います。このような

特別支援教育研究センター長

**四日市 章**



状況の中で、我が国の特別支援教育がさらに発展し、一人ひとりの子どもたちが、より充実した人生を過ごせるために、このセンターもその一端の役割を担い、その責任を果たしていかなければなりません。そのためにも、附属学校や教育局、また、人間系・障害科学域との連携を基盤とするこの研究センターが、関係組織との協力・信頼関係を継続・発展させ、一体化した強力な組織としてこれらの組織のもつ教育的な資産を国内外に発信していくことがとても大切だと思っています。毎日の活動は小さなものですが、それを積み重ねながら、センターのスタッフと共に、このセンターがより良い役割を果たすことができるようつねに考え、一步一步、進んでいきたいと思っています。これからも、どうぞ本センターにご指導ご支援いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

## 附属学校研究発表会

附属学校教育局 講師 木村 範子



本発表会は「人とつながる・地球とつながる・異文化とつながる力を育てる～筑波大学附属学校からの発信～」をテーマに2月25日(土)に行われた。まず、「先導的教育拠点研究」事業から、①附属坂戸高校の森林環境教育の聞き書きを通したコミュニケーション力の育成(「子どものコミュニケーション能力を育てる」(プロジェクト研究2))、②「附属学校におけるスクールカウンセラーの活動と学校との連携」、③附属大塚特別支援学校の「超早期段階における知的・重複・発達障害児に対する先駆的な教育研究モデル事業」中間報告の発表が行われた。続く休憩・ポスターセッション後、「国際研究拠点研究」事業から、まず昨年度ご退官の坪田教授から「グローバル人材の育成のために」と題する統括がなされ、①「視覚特別支援学校の『国際教育』では国際支援事業の状況、②「プロジェクト4『国際的資質を育てる』におけるアンケート調査について」では児童生徒の国際的意識の調査概要、③「『オリンピック教育』について」では附属学校におけるオリンピック教育の発表がなされた。

以上、盛り沢山であったが、充実した研究発表会であった。

## 春期研修会

附属学校教育局 教授 熊谷 恵子



去る2月25日に、JAXA宇宙科学研究所の阪本成一教授をお招きして、『「はやぶさ」とALMAでさぐる太陽系のはじまり』という題目でご講演いただいた。阪本先生は、筑波大学附属駒場中・高等学校の卒業生でもあり、非常に多忙な先生ではあるが、ご講演を快く引き受けていただいた。小惑星探査機「はやぶさ」は小惑星イトカワから物質を持ち帰った。それは、太陽系の誕生を探るためにも非常に重要な任務であったが、それと同時に、太陽系の誕生を探るということは、生命の起源を探ることにもつながるという。宇宙の壮大なお話がロマンを感じさせ印象に強く残った。

午後には、附属学校児童の演技として、附属桐が丘特別支援学校5、6年生による「KBSニュース」を行っていただいた。ニュースキャスターになりきり、職業人あるいは大学生の先輩達にインタビューをする映像を流し解説するというものであった。肢体不自由のある子ども達の通う附属桐が丘特別支援学校では、このように小学生の頃から興味深いキャリア教育を実践しているということがわかり参考になった。また、子ども達の立派なニュースキャスターぶりもたいへん頼もしく感じた。

## 新校舎での新任教員交流会

附属学校教育局 教授 江口 勇治

文京地区の新校舎ができて初めての新任教員交流会が、21名の新任教員の参加により、平成23年3月27日の午後開催されました。東照雄教育長の筑波大学の附属であることの意義と今後の精進に対する叱咤激励の講話からスタートして、その後熊谷委員長の講話と小グループごとの交流と話し合いがもたれました。

新任教員としてすでに一年ほどが過ぎたこともあり、全くの新人ではありませんでしたが、附属での実践等の悩みや課題等が率直に話し合われ、今後の教育の方向性についてのある程度の共有が行われる機会になったと思います。筑波大学附属での今後の一層の活躍を、指導教員の一人として願っています。一緒に頑張りましょう。





この指とまれ この指とまれ この指とまれ



この指とまれ この指とまれ この指とまれ

## 私と授業と基礎英語

附属高等学校 1年 橋爪鞠実

(平成23年度附属中学校卒業)

私は中学校に入って初めて英語を学びました。先生方の丁寧でユーモア溢れるご指導と、また未知の言語を学ぶ好奇心から、自然と英語が好きになっていきました。まず、私の英語学習についてお話したいと思います。

初めはアルファベットから、一つ一つの発音を丁寧に教えていただきました。私の中学校では、一年生の夏休みまでは「書く」という作業を行わず、ひたすら「聞く」、「話す」ことを反復練習します。今思えばそれが英語を好きになったきっかけでした。それで発音に磨きがかかった上、英語を「楽しむ」ものとして、「語学」ではなく「語楽」として受け止めたような気がします。

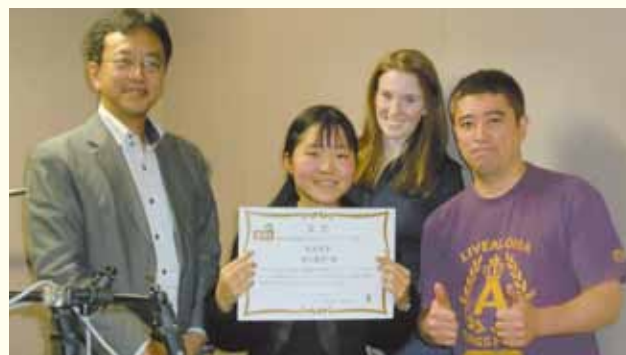
また、それと並行して聴き続けていたのはNHKのラジオ講座です。ここでは詳しい文法だけでなく、ネイティブの方達がスタッフなので、英語圏の文化・風習についても学びました。続きが気になるくらい面白いストーリー構成や、週一回のお楽しみコーナーなどセクションが充実していて、三年間欠かさずに聴いていました。私が英語を得意科目にできたのは、この「学校」と「基礎英語」を並行して学ぶことで、大変バランスの良い学習が出来たからだと思います。

さて、NHK創作スキットとは、その基礎英語に出てくる登場人物を用いて、自分だけのオリジナルダイアログを創作するというものです。私は、以前から参加したいと思っていたので、気軽に興味本位で申し込んでみました。

そして、みんなを笑わせられるような、ユーモアに富んだものを作りたいと思い、出来たのがこのスキットでした。

本当に面白い作品を作るには、想像力、いわば直感が大切だと思われる方が多いと思います。しかし、それに加えて、どれだけラジオを聴いているか、つまりどれ程英語が好きか、真剣に学ぼうとしているかが試される場だとも思います。ラジオ講座は、楽しいストーリーに沿って、発音、文法、背景、イディオム等多くのことを学べる、何よりも耳が鍛えられるので、言語を学ぶ上での格好の教材だと、今回の受賞をきっかけにあらためて思いました。

最後に、まさかこんな素晴らしい賞をいただけるとは思っていなかったもので、今は大変嬉しく感じています。3年間私の英語学習を支えてくれた方達に感謝したいです。



NHK基礎英語創作スキット・コント大会で最優秀賞を受賞した橋爪さん(中学3年時に受賞)と基礎英語のスタッフ

新任教員

奮闘中

## 子どもたちと共に

筑波大学附属小学校での、長いようで短い1ヶ月が過ぎようとしています。私は昨年度、9年間勤めた横浜国立大学教育人間科学部附属横浜小学校を退職し、この4月より本校に勤務することになりました。毎朝、横浜より5時半の電車に乗りながら、「今日は子どもたちと共にどんな楽しい授業をつくることができるかな」とワクワクしながら考えます。そして放課後、子どもたちを見送りながら、「今日もたくさんの笑顔があったかな」と振り返ります。

筑波大学附属小学校の子どもたちと出会って過ごしてきたこれまでの間、楽しさを自分たちで作り出し、自分たちの成長につなげていく子どもたちの姿に驚かされ、そこからたくさんの元気をもらってきました。教室の仲間と共に学びをつくりあげ、自らの力を高めようと、頭の汗、体の汗そして心の汗をうんとかいて、何事も前向きに一生懸命取り組む筑波大学附属

附属小学校 教諭  
由井 蘭 健



小学校の子どもたち。その子どもたちに負けないように、私もしっかりと学び、汗をうんとかいて、より充実した楽しさ、最高の笑顔を目指し、子どもたちと共に学びをつくりあげていきたいと思っています。





# 第7回「科学の芽」賞

応募しましょう！

附属学校教育局 教授 松本末男

今年も「科学の芽」賞が、始まります。大学本部で4月26日に記者発表が行われ、全国に呼びかけを始めました。「科学の芽」賞は、御存じのように大学が、朝永振一郎博士生誕100周年の事業の一環として始めたものです。大学全体として取り組み、早いもので、7年目を迎えます。今年も、全国の多くの小学生、中学生、高校生が、自然の中の不思議さを、探求していき、その成果としてまとめられた作品が寄せられることを期待しています。

昨年度は全国29都道府県の各学校及び7カ国（ドイツ、韓国、中国、シンガポール、タイ、マレーシア、インドネシア）の日本人学校から2,275件の応募がありました。

毎年応募件数が、着実に増えているのは、「科学の芽」賞が少しずつ日本の中で浸透しているようでとても喜ばしいことです。学校全体で取り組んでくださるところもあり、この賞に応募することで、子供たちが、科学を好きになるきっかけになってくれれば、こんなに嬉しいことはありません。子供たちが、少しでもいいから科学に対して目を開き、不思議さを観察して考え、謎を解いてほしいと思います。

今年は、8月20日から9月30日が、応募期間です。そして、表彰式と発表会は12月22日(土)に筑波大学学生会館で行うことが決まっています。夏休み中に日頃から「どうしてかな?」「なぜなんだろう?」と、不思議に思っていることを探求して是非「科学の芽」賞に応募してくれることを心待ちにしています。

これまで、「科学の芽」賞の受賞作品を本にして、2冊出版してきました。今回は、3冊目として6月に、『もっと知りたい!「科学の芽」の世界』(筑波大学出版会)のPART3を出版予定です。今回の本は、一昨年と昨年の受賞作品を中心に紹介しています。本の中に、ノーベル賞受賞学者で、本学の名誉教授である白川英樹先生から、子供たちに向けてお言葉を頂いて掲載しています。どうぞ楽しみにしてください。



## 《編集後記》

附属学校教育局に着任してから、毎年、何校かずつ、入学式に出席しています。今年度は、二つの学校で入学式に出席させていただきました。附属久里浜特別支援学校と附属駒場中・高等学校です。附属久里浜特別支援学校では、幼稚部と小学部の合同で入学式が行われました。式次第や校長先生のお祝いの言葉、来賓の方のお話は、知的障害を伴う自閉症のお子さんにも理解しやすいようにと、プロジェクターで視覚呈示されます。その内容は、文字だけでなく絵や写真も含めた構成で、きっちりと情報支援が行われておりました。附属駒場中・高等学校では、午前中学校、午後高校の入学式が行われました。東京オリンピックの際、東洋の魔女と呼ばれた女子バレーが練習に使ったという、大きな体育館での式は、吹奏楽部の演奏が新入生を迎えてくれます。在校生が水田学習の際に、育てたお米でふかしたお赤飯がふるまわれ、校内では珍しい品種の桃があちらこちらで美しく咲いておりました。どちらの学校においても、日頃の教育実践の充実を垣間見ることができる入学式でした。

(菅野和恵)

ポローニア  
paulownia

vol.24

発行日……平成24(2012)年5月31日

発行者……附属学校教育局教育長 東 照雄

発行所……筑波大学附属学校教育局 広報誌  
ポローニア編集委員会

〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1 電話 03-3942-6800

編集委員長……田中輝美

編集委員……菅野和恵・大島由之・小林美智子  
板橋安人・杉本盛太郎

デザイン……スピーチ・バルーン

印刷……広研印刷 使用紙：U-litimax [日本製紙]